

研究ノート

日韓併合期・日本人は何を考えていたか①（新連載）

鄭大均（東京都立大学名誉教授）

まえがき

今は亡き人類学者のクリフォード・ギアーツ（Clifford Geertz）が言っていたことだが、第二次世界大戦後に独立した「新興国」(new state) に生きる人々には、二つの欲望（動機）に同時に駆り立てられる状況があって、両者の間に良い緊張関係が維持されるとき国家は発展の推進力を得るが、二つの欲望はしばしば対立し、それは国家の発展を妨げる最大の障害になるものでもある。

二つの欲望とはなにか。一方が国際社会で重んじられる存在、名のある存在になりたいという欲望であるとしたら、他方は有能で活力ある現代国家を建設したいという欲望である。一方が一人前の存在として認知されたいという自己主張であるとしたら、他方は国民の生活水準を向上させ、効果的な政治体制を作り、社会正義を実現したいという実用的な欲望であり、ここでは前者を「自尊の欲望」、後者を「実利の欲望」と呼んでおく。

「統合的革命」（『文化の解釈学』岩波書店所収、1987年刊・原題The Integrative Revolution: Primordial Sentiments and Civil Politics in the New States,1963）と題する同論文で、ギアーツが念頭においていたのは多民族、多言語、多宗教のアジア・アフリカ諸国であるが、二つの欲望は、二つの理由で深刻で慢性的な緊張関係を生みだすようになるという。一つは人々の自己意識が血縁や人種、地域、言語、地域、宗教といった原初的感情と深く結びついているためであり、もう一つは集団の目的を実現するために、独立国家の重要性が増しているためである。ギアーツの論考は、アジアやアフリカに多くの独立国家が誕生し、やがて厳しい現実と直面し始めていたころに書かれたものである。

論文に接したのは80年代後半のことで、そのころ私は韓国で仕事をしていて、「原初的感情」という言葉が心に響いたが、それはこの言葉を通して今まで見えていなかった韓国が見えてきた、という実感があったからなのだろう。なにかおもしろい論文が書けるような気がしたが、結局はなにも書けないまま時間が過ぎ、やがては論考のことも忘れていた。

今、改めて論考を読んで思うのは、多くの新興国とは異質な韓国の言語・民族・文化的同質性の性格とともに、二つの欲望間により緊張関係を維持するのに貢献した、かつての政治指導者の姿である。韓国はギアーツがいう意味での新興国ではあるが、多言語、多民族、多宗教の新興国の指導者からしたら、羨ましいと思われておかしくないところがある。大統領の言語を理解できない国民が誰もいないというような状況を、普通の新興国の指導者は想像することができるだろうか。どの言語を国語や公用語として選択するかは、独立時に多くの新興国を悩ませた問題であり、またどの言語が選択されても、そ

れはある集団にとっては「異邦人」の言語を意味するものであり、それは不満や批判というだけではなく、国家を崩壊に導く要因になるものでもあった。そんな悩みから自由でいられる国の指導者は、ひとまず幸運といわねばならない。

韓国はなぜ極端に変化するのか

とはいえ、有能で活力ある現代国家は自然にできあがるものではない。韓国の政治指導者がこの点でなにをしてきたのかは重要であるが、反共主義と反日主義という二つの国家理念が、二つの欲望間の均衡を維持するのに意外な貢献をしていたのだという点は見逃せない。反共主義を維持するためには、反日主義をある程度は抑制する必要があったからで、かつての日韓の政府間には反共国家としての連帯感があった。

だが80年代の韓国の民主化は、それをいとも簡単に反故にしてしまう。韓国の民主化は内でも外でも肯定的に語られることが多いが、それがこの国を反共主義と反日主義の国から、民族主義と反日主義の国へと変貌させたことの代価は計り知れない。民主化がそのまま反共主義批判を意味すると考える必要はないし、実際、反共主義を重視する韓国人リベラルもいたのだと思う。しかし韓国の民主化は結局のところ、反共主義の追放ないしは形骸化に手を貸したのであり、そこには当然のことながら北朝鮮の影響もあったのだろう。

反共主義が民族主義に変化するとは何を意味するのか。反共主義が北朝鮮との異質性を重視する態度であるとする、民族主義はその同質性を重視する。前者が「民族」(nation)より「国家」(state)を重視する立場であるとする、後者は国家より民族を重視する態度であり、国家と民族は一致すべきであるとする。前者が南の北に対する優越性、すなわち自由民主主義や思想・信条の自由を重視する態度であるとする、後者は北の抗日闘争の歴史を評価し、南の国家の正統性に疑念を表出する立場であるという点も重要であろう。

反共主義と民族主義のせめぎ合いの歴史は韓国の歴史であり、70年代まで優位の立場にあったのは反共主義である。しかしこの国の民族主義には、潜在能力の高さがあった。北にいる同胞を敵と見做せという反共主義のメッセージに比べると、民族主義には韓国人の原初的感情に訴えるところがあったのであり、反共主義は軍人文化とともに押し付けられるがゆえに、反発を招きやすいものでもあった。

とまれ、こうして韓国には民主化の時代が到来し、今日の韓国は民族主義と反日主義を国家理念とする国になっているが、その過程で勢いを得た反日主義は慰安婦と徴用工というシュール(超現実)なテーマを選択、それを日本に突き付けるという事態が生じる。とはいえ、このテーマは元はといえば、「良心的日本人」などと呼ばれる日本人活動家によって編み出されたものである。従軍慰安婦の問題も徴用工の問題も、自国の加害者性への強迫的な負い目意識に捕われた日本人活動家たちが、まずは国内で実践したテーマであり、訴訟闘争もまずは日本で繰り広げられたが、それはその時点では成功しなかった。

しかし国内で失敗した後に、活動家たちがそれを韓国に持ち込んだとき、それがやがては韓国人の原初的感情に火を付けうるものであるというセンスを、この「良心的日本人」たちは持ち合わせていなかった。日韓関係が抜き差しならぬものになるのは、これでほと

んど決定的であったが、いくつか予期せぬ出来事も生じた。「平和の少女像」という名の慰安婦像が国内外に設置されるというのもその一つで、シュールなテーマは今や日本人や韓国人の歴史観に組み込まれ、それを当代のフェミニズムやポストモダニズムやポストコロニアリズムの人権思想が支える、という構図が見てとれる。「平和の少女像」とは、この人権の時代の非条理を象徴する、シュールな物語の主人公なのである。

それにしても印象的なのは、かくも極端な変化をかくも安易に進行させてしまう、韓国という国の可塑性の高さである。なぜなのだろうか。私見によれば、それは多くの新興国に見られる「人心の離反」とはあべこべの「人心の一致」という現象で、これは言語・民族的同質性を特徴とする国に原初的感情が提唱されたときに、なにが起きるのかを教えてくださいの重要な事例である。

では、多くの新興国では「人心の離反」を生みだすものが、なぜ韓国では「人心の一致」を生みだすのか。韓国においては、民族的ナルシズム(自己愛)の歌を歌い、隣国を見下す歌を歌っても、そのことによって傷つく少数者集団を想定するのが難しいからである。重要なのは、この国には有力なエスニック・グループ(少数民族集団)が存在しないということであり、この条件が韓国の経験を他国の経験から分け隔てるのである。

言い換えると、普通の新興国に生きる人々は、その歴史や自らの経験を通して、自己が所属する集団の属性に基づくナルシズムの表明が他集団の尊厳を傷つけるとか、政治的混乱をもたらすということを学ぶ。「人心の離反」とはそのことを意味する。ところが国内に有力なエスニック・グループが不在の韓国では、自らの功名心のためであるとか、民族的ナルシズムのために何かしらのキャンペーンが展開されても、それが社会的に弾劾されることは考えにくいし、民主化の時代の今日、それはいつになく奨励されているのである。

ここには三つの問題がある。第一に民族的ナルシズムの表明、つまり原初的感情の提唱が韓国のような国、つまり言語・民族的同質性が高い国においては、簡単に「人心の一致」を見出してしまうということの危うさの感覚が欠如しているということ。第二に原初的感情に身を任せることが「自尊の欲望」と「実利の欲望」のバランスを切り崩し、自国を危険にさらすことになるのだという自覚の欠如の問題。そして第三に、民主化の時代の韓国には、韓国という国を転覆することを自己の使命とする主体思想派(主思派)のような勢力がいて(今日の青瓦台やソウル市庁を牛耳っているのは彼らやその仲間である)、「危うさの感覚」の欠如の浸透は、部分的には彼らの成果なのである。

さて、私はなにを問題にしたいというのか。それは誰もが自明のこととしているが、本来であれば異常な風景を野放しにしてきたことの代価についてである。たとえば韓国は、自国との関係で隣国の日本を、古代史においては韓国による文化的受患者として、近代史においてはその恩を仇で返す文化的剥奪者や経済的収奪者として描き、それをマントラ(呪文)のごとく学校やテレビや博物館やシネマ・コンプレックスで飽くことなくたれ流し、それを韓国人の心と身体に刻み込んできた。

しかしそれは、韓国に民族・言語・文化的少数者が不在であればこそ可能だった、偏見やステレオタイプではなかったのか。たとえばこの国に数十万人の日系韓国人がいたとしたら、その教科書に「日帝」の「蛮行」を心置きなく記すという状況を想像することができるのだろうか。しかもそれに異論や反論を許さなかったというのは、自由民主主義の国

として恥ずべきことではなかったのか。李米薫編『反日種族主義』(文藝春秋、2019)はそれに全面的な闘いを挑んだ画期的作品であったが、しかしそれでもこの本の刊行が、韓国に自己批判の動きをもたらしているというわけではないのである。

ここで日本の状況についても少しだけ言及しておきたい。言語・民族的同質性という状況は日本にもある。日本人が民族的ナルシズムと無縁というわけではないだろう。しかしこの国のとくに若い世代に見てとれるのは、原初的感情そのものの著しい退化という現象で、原初的感情が退化すれば、民族的ナルシズムは活気を失う。

加えて言えば、今日の日本には、仮にだれかが民族的ナルシズムを発揮しても、その告発・糾弾のために待機している日本人と少数者の集団がいる。在日韓国・朝鮮人といわれる人々がそれで、規模は小さいが、彼らはいつの間にかこの国の民族的ナルシズムやナショナリズムを防止する自警団的役割を担っているのである。

韓国経験の例外性ということを先に記したが、こうして見ると、韓国に似ているのは他にもない、一卵性双生児の片割れである北朝鮮であるということが明らかになるであろう。この国が世界にも類例のない自尊国家たりえた背景には、言語・民族的同質性という条件があったのだらうし、それを韓国よりも完璧に仕立て上げることができたのは、自由民主主義に代わる人民民主主義の力によるものだったのだらう。

かつての韓国は、「反共」と「反日」という二頭の馬に率いられた馬車として知られていたが、それが今では「民族」と「反日」という二頭立ての馬車に取り替えられている。しかし馬車には北朝鮮が大嫌いな客も日本が好きだという客も乗っているのだから、二頭の馬にも本来なら互いを牽制する関係があって良かったのだと思うが、二頭の馬は今や似た者同士であり、気がついてみると、御者は二頭の馬を懸命に鞭打って、馬車を北京や平壤の方向に向けて走らせようとしている。韓国の国民は、だから今こそこの国が向かおうとしている北朝鮮や中国という国に、以前より関心を向けるべきなのである。今日の韓国を改造しようとするものたちが心の故郷とするのは、アメリカや日本ではなく、北朝鮮や中国なのだから。

韓国の失われた時を求めて

不思議な書き出しになってしまったが、本稿はその不思議の国の失われた時をテーマにするものである。韓国憲法の前文に、「大韓国民は [1919年の] 三・一運動により建立された大韓民国臨時政府の法統」を継承するという記述がある。このことから大韓民国は大韓帝国(1897-1910)の正統性を継承するのだと自任していることが分かるが、しかしそれはシュールな歴史観というものであって、大韓帝国の後の1910年から1945年までの間、韓国は日本と政治的共同体を形成していたのであり、この時代の韓国は日本帝国の一部を構成していたと考える方がリアリスティックであろう。

この時代にたとえば朝鮮人がパリやロンドンに行くというとき、彼らは大韓帝国の旅券を持っていたわけでも、上海臨時政府が発行した旅券を持っていたわけでもなくて、大日本帝国の旅券を持って出かけていたのであり、この時代に大量の朝鮮人が「内地」(日本)への移動を夢見、それを実行したのは日本が外国でないことを知っていたからではないのか。

言い換えると、韓国憲法前文にあるような歴史観は、現代を生きる韓国人が自分たちの都合によって編み出した恣意性に富む歴史観であって、日韓友好のためなどといって、そんな歴史観に参加したら、われわれは人間としてのなにか大事なものを失ってしまう。それには抵抗したいと思う。日本統治期を「日帝強占期」などと呼んで、それを日本の「抑圧」「強制」「収奪」「暴力」に対する「抵抗」の歴史として描き、異論・反論を許容しない韓国の全体主義にも抵抗したい。

ただ反対するだけではなく、シュールな物語に対抗しうる日本統治期の新しい物語を作り出したいとも思う。日本統治期が美しい時代であったなどという、もう一つのシュールな物語を語ろうというのではない。しかしそれでもこの時代には、私たちが知らされてきたよりは遥かに豊かで、刺激に満ちた体験があったことを伝えたい。戦後の日本で朝鮮統治期の歴史形成に従事したのは、帝国主義との闘争や植民地主義の歴史の告発・糾弾を自己の使命とする左翼の研究者たちであり、彼らの作品は日本人にいたずらに負い目意識を注入すると同時に、韓国人の原初的感情を喚起するにも貢献した。そういう人間を不幸にする物語とは動機を異にする物語を作ってみたいと思う。

若干のおさらいをしておく、日本の朝鮮統治が終焉した1945年の時点で、朝鮮の地には70万人ほどの日本人がいた。しかし、それに日本統治期に朝鮮の地を旅したり、またそのある時期に朝鮮の地に住んでいた日本人を含めると、数百万人の日本人があつた時代の朝鮮の山河に触れ、またその地にいる朝鮮人と何らかの関わりを持っていたということになるだろう。

本稿はそうした日本人が書き残した作品を収集、それをアッサンブリー(組み立て)し、彼らがなにを感じ、なにを考えていたのかを若干の解説を加えて整理してみたものである。もっとも頻繁にとり上げられるのは1920年代から30年代にかけての作品であるが、朝鮮半島への日本人コロ(入植者)の進出は、実際にはそれ以前に始まっているのだから、ときには19世紀末に書かれた作品がとり上げられることもあるし、逆に戦後の作品に言及することもある。

本稿は方法論的には1990年代半ばに上梓した『韓国のイメージ』(中央公論社、1995年)を継承するもので、同書が戦後日本人の韓国への眺めの軌跡や特徴を明らかにしようとした本であるとしたら、本稿は日本統治期の日本人の韓国(朝鮮)への眺めに関心を寄せるものである。『韓国のイメージ』にはもう一冊、『日本のイメージ』(中央公論社、1998年)という姉妹書があって、いずれもハロルド・アイザックス(Harold R. Isaacs, 政治学者、1910-86)がアメリカ人の中国およびインドに対する眺めを考察した*Scratches on Our Minds*, Massachusetts Institute of Technology, 1958(『中国のイメージ』サイマル出版会、1960年はその部分訳)の影響を強く受けたものである。本稿はそれに加え、渡辺京二の『逝きし世の面影』(平凡社ライブラリー)に啓示を受けた部分があることも記しておきたい。

とはいっても、『逝きし世の面影』と本稿との間には似ていないことの方が多い。渡辺氏のそれが幕末から明治初期にかけて来日した欧米人の著述を媒介にして、今や失われた「古い日本文明」の姿を偲ぶものであるとしたら、本稿は、日本統治期に朝鮮と関わりを持った日本人の作品を通して、失われた韓国(朝鮮)の姿を追体験しようとするものであり、渡辺氏が欧米人の「文明」によって変化を余儀なくされた日本の姿に立ち会った、欧米人の証言に関心を寄せているとしたら、本稿は日本統治によって変化を余儀なくされ

た韓国の姿に立ち会った、日本人たちの証言に関心を寄せている。

渡辺京二氏によれば、失われた「日本文明の在りし日の姿を偲ぶ」には、異邦人の証言に頼るのがよいのだという。同感である。本稿はその失われた韓国の人や自然や文化を、日本人の証言に依拠して追体験しようとするものであるが、日本人の証言がそれに相応しいと考えるのは、日本人が韓の地に変化を引き起した張本人であるとともに、この地においてその変化に立ち会い、それを記述した異邦人がいるとしたら、それは誰よりも日本人を意味したからである。

本稿にはさまざまな日本人が登場する。観察力や洞察力に優れた証言もあれば、偏見やステレオタイプの産物と考えられる証言もある。よく知られた大学教授や総督府官僚の証言もあれば、さほど有名とはいえない名前も登場する。いずれもこの時代の誰かの体験を代表するものであり、誰かの「真実」や「事実」を代表すると考えればよい。本来であれば、それに市井の人々の証言、たとえば京城の電車の運転手だとか床屋のおじさんの証言などを加えたいと思うし、女性の言葉も加えたい。だが残念ながらこの時代の残された資料に市井の声を探るのは難しいし、女性の声を探すのだって容易ではない。たまに見つかっても、紹介するに値するほど興味深いものとは限らない。

以下、各章を構成するのは「風景」「発見」「出会いの情景」「京城賛歌」「女と洗濯」「労働と身体」「朝鮮人とはだれか」といったテーマであるが、これは今後変更する可能性がある。日本人にはおそらく今も昔も得意の分野と苦手の分野というものがあって、たとえば同じ時代、韓国に駐在していた欧米人にはできて日本人には難題というものがある。それがなにかについては後述するとして、この苦手の分野についてはその後の日本人がそれを克服したとは到底いえない現状があるので、そんなテーマもぜひとり上げてみたい。この時代の日本人の朝鮮体験は、彼らにとってもっとも重要な異文化体験であったはずであり、その証言から私たちは日本人がいかに変わったかと同時に、変わらなかったかを知ることができるはずである。

主要な資料が当時、日本や朝鮮で刊行された単行本や雑誌・新聞の記事であることはすでに記したが、思考や感情の動きを探るにはエッセイ(随筆)がよい。本稿に安倍能成あべよしげがよく登場するのはそのためで、彼はおそらくどこに住んでいても良いエッセイを書いた人なのだと思うが、たまたま1926年春から1940年夏までの十五年間を、京城帝国大学教授として京城の地で過ごしていたのは、私たちにとって幸運である。安倍のエッセイには観察と思考と感情の見事な調合があって、その何冊かは復刻されておかしくないのだが、それは結局なされていない。だから本稿ではその作品をなるべくとり上げたいと思うが、とはいっても、安倍能成は本稿に登場する数十人の主人公の一人に過ぎない。安倍能成が登場するなら、彼に影響を与えた京城の友人や知人たちにも登場願わなければならないし、彼らとは思想や職業や経験を異にする人々の証言も忘れることはできない。

なお引用文中、旧字体は新字体に、旧仮名づかいは新仮名づかいに改め、ルビを加えた箇所もある。[]は著者による注である。稀にはあるが、誤字を修正した箇所もあり、また読みやすさを考えて漢字を仮名に改めた部分もある。